平成29年度「きのさき見て歩き」第3回 開催しました

10月26日(木)、平成29年度 「きのさき見て歩き」第3回~玄武洞巡り~を開催しました。

コース 城崎庁舎 → 城崎大橋 → 戸島 → 結 → 玄武洞 → 渡船 → JR玄武洞駅

→ J R 城崎温泉駅 → 城崎庁舎

講 師 坂田 文一郎氏 (城崎文化協会会長)

参加者 8名

台風一過。先日の濁流が嘘のように青く 美しい円山川の流れを見ることができた。 秋の空も澄み渡って美しく爽やかな「見て 歩き」となった。

<城崎大橋から河口域を望む>



<戸島 円山川河畔のススキの穂>



<戸島から対岸の観音浦を見る>



観音浦は「温泉寺縁起」ゆかりの場所である。

奈良の都の仏師稽文が長谷寺の観音像を刻んだ同じ木で 長楽寺の本尊仏を作っていたところ中風にかかり、未完のま ま納めた。そのために悪い病気が流行し、村人は観音の祟り だと尊像を難波の浦に流した。それが巡り巡って観音浦に流 れ着き、ちょうど中風の治療のために城崎に来ていた稽文が 拾い上げ完成させ弁天山に安置した。その観音仏の眉間から でた光が山の中腹を照らし出したのでそこに寺を建て温泉 寺と命名したといわれる。



道中で明治 42 年に城崎、玄武洞を訪れた柳田國男の『北國紀行』を読む。鉄道が開通する直前で久美浜との境の三原峠を越えて城崎に入り、「湯島は山間なれども、一面は又水郷の趣あり」と記している。その円山川下流域の景観を味わう。また、湯島の上流、豊岡に近づくあたりでは、水がしばしば堤を超えるので地盤を上げて家を建てている様子や杞柳を栽培して柳行李を編み商売をする様子など、当時の下流域の暮らしぶりが記されていた。

<玄武洞公園>

朱雀洞



青龍洞



玄武洞





青龍洞の"落ちない石" あやかって合格祈願をする人 もあるそうだ。参加者の中に も昨年祈願して願いがかな い、今年お礼参りがしたくて 来たという方もあった。



民衆派の詩人白鳥省吾(昭和9年来訪)の紀行文を読む。玄武洞駅で下車して渡船し玄武洞を訪れてその景観に驚嘆している。「俳人ならずとも一句あるところだ」とあり、参加者も作品をと今回はそれぞれが俳句や短歌に挑戦してみた。

<渡船>



白鳥省吾とは逆コースだが、舟で玄武洞から J R玄武洞駅へ。岸にはススキの穂が風になびく緩やかな流れのなかを対岸へ渡る。あっという間だが、おおらかな円山川下流域の風景に包まれる贅沢な時間を堪能した。



イラスト協力 WANPUG